

存在し

生き続ける

~~生きることは生き続けることである。生き続けることは生きることである。~~

「アッ」に反応する (répondre) のが、養
育の人間の本来的な等価物である。反応し
ない時には、養育者「母」はどのくらいか。
その時人間は何ものでも無い。~~それは~~

養育者の役割

① 養育者は「母」は無であり、養育はす
べからず本来の等価物として完全な充満である
。それゆえ、養育は「母」として危険性
があるから「母」は生きるとしては一瞬一瞬
に於いて creative なものとなるのである。養
育は「母」の危険性なくして人間として主体性
はあり得ない。決して養育は「母」の存在
の存在者は主体性をもたない。石や砂、植物や動物
である。それらの存在者は常に完全な充満
のなかでいる。その存在は静態的・固定的・
持続的である。』その存在は存在のみで成り立
たず、その生は生のみで成り立つてくる。これ
に反して人間存在に於いては、存在は非存在

何故生と死を入れろか。

除くにしてもさ...かえしれはいい。

との間髪を容れず交替のかたすに於いてあり。
生は死との間髪を容れず交替のかたすに於いてある。
 時間の流れの順序において存在、非存在、存在、非存在、反して生、死、生、死とくり返されていくと、
 は反して人間が虚無ではなく本来の人間としてあり時、
 どの一瞬をとっても非存在にして死があるとは反して。事柄の順序において存在、非存在、存在、非存在、反して生、死、生、死とくり返されると言っているのである。

ここで次のような疑問を問う人がいるであろう。
 そういえるのなら、どの一瞬をと

っても存在にして生かあるとは反して非存在と存在、反して死と生の交替であるとも言えるのでは反してか。だがそれは言えなないのである。
 人間はありしめられたのである。生かされたのである。
 創造の最初の一瞬に存在と生があり、非存在と死とはその後だとは言

てはならない。まさにその創造の最初の一瞬に、存在と生の他に非存在と死の契機もあるのである。

る。時間ではなく事柄の順序として生ずる存在と生があると言つてゐるのである。事柄の順序としてどうかが生かといふことが決定的に重要である。かくして人間の存在は非存在に裏打された完全な存在の中にある。生は死に裏打された完全な存在の中にあるといえる。人間存在のどの一瞬をとつても、そこには非存在の契機を含んで存在があり、人間の生のどの一瞬をとつてもそこには死の契機を含んだ生がある。つくられた存在と生(人間以外のもの)に対して自らがつくる存在と生

(人間)、ここに人間の独自性がある。以上が最初の創造、人間の本来の姿、人間が降り行くべき最初の一瞬、最初の一点である。 ⁽²³⁾ そしてそれはアッラーのみもとにあるのだといふ。 つまり إليه مرجعكم جميعاً なのである。 ⁽²⁴⁾

生に、根本規定に己れを委ねるといふことは、委ねるといふ可能性もまた想定されてゐるといふ条件下において初めてその意味をもつと書いた。そしてこれに続けて、(しかし

この論の要は